京都第一日赤だより
vol.91 春号
絆 きずな
2024年5月発行 発行責任者/上島 康生 印刷所/東洋印刷株式会社
発行所 京都第一赤十字病院 京都市東山区本町十五丁目749番地 TEL.075-561-1121(代)
URL http://www.kyoto-1.jrc.or.jp/ E-mail info@kyoto-1.jrc.or.jp

沢田尚久
副院長
巻末のご挨拶

SAWADA
TAKAHISA

青空に新緑が映える季節となりました。平素は病病連携・病診連携でご支援・ご指導を賜り有り難うございます。

新たな年度を迎えましたが、今回は例年とは少し様相が異なります。

一つ目は6年ぶりに診療報酬・介護報酬・障害福祉サービス等報酬の3つが同時に見直されるトリプル改定です。超高齢社会が進んでさまざまな課題が生じる「2025年問題」、生産年齢人口が減少して財政などが厳しくなる「2040年問題」への対処として、これまで以上に医療・介護・福祉の連携や医療DX、外来機能の明確化と分化・連携を織り込む重要な改訂となりました。二つ目は他の業種に5年遅れて導入された「医師の働き方改革」です。これまでの我が国の医療は医師の長時間労働に支えられていましたが、医師が健康に働き続けることの出来る勤務環境を整備することが、医療の質・安全を確保して持続可能な医療提供体制を維持することに重要です。しかし、総業務量が現在も超過している中で「言うは易く行うは難し」、創意工夫が必要です。

当院は本年4月に新病院長・大辻英吾を迎え、新たな体制を踏み出しました。各診療科・部門とも所属メンバーを更新しています。地域住民の命と健康を守るため、連携病院・医院の皆様と共に前進したいと思います。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

Started YouTube!
SUBSCRIBE
CHECK
病院紹介
病院機能や取り組みの紹介がご覧いただけます
受診案内
受付～会計までの流れがご覧いただけます

京都第一赤十字病院
日本赤十字社
人間を救うのは、人間だ。Our world.Your move.

絆

京都第一日赤だより

きずな

人道と奉仕の赤十字精神に基づき、
患者さまにとって安心できる
適切な医療を行ないます。

春号
2024年5月発行
vol.91

京都第一赤十字病院 新院長

大辻 英吾

OTSUJI EIGO

座右の銘 **和合円満**

病院職員全員が朗らかに楽しい雰囲気の中で
仕事をすることができれば、各人の実力が発揮されて
結果として大きな力となると考えています。

2024年4月1日付で池田栄人先生の後任として病院長に就任いたしました大辻英吾と申します。地域の先生方には病病連携・病診連携を通してお世話になり大変有難うございます。

私は昭和59年に京都府立医科大学を卒業し、第一外科学教室に入局をして消化器外科医としての道を歩み始めて高橋俊雄教授や山岸久一教授のご指導を受けてきました。平成19年に京都府立医科大学消化器外科の教授に就任してこの3月に退任するまでの17年の間に、附属病院の医療安全管理部長を6年間経験し、また、副学長時代には地域医療全般を担当して参りました。今後は京都第一赤十字病院の病院長としてこのような経験を生かすことができれば幸いに存じます。

私は「病院造りは人づくり」と考えており、病院職員全員が患者様を思いやる優しい心を持った、人間味あふれる社会人であってほしいと願っています。また、病院が医療を実践するうえで最も大切なことは医療安全であると認識しています。一人でも多くの患者様が安心して医療を任せることができるような、皆様から信頼され愛される「最高の基幹病院」でありたいと願っています。

「最高の基幹病院」としての使命を全うできるように努力いたしますので、今後ともご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

GREETINGS OF THE APPOINTMENT 就任のご挨拶

職員全員で安全を構築します

令和6年1月1日付で副院長を拝命しましたのでご挨拶申し上げます。

昨年4月に院長補佐になり、医療安全推進室長として主に医療安全に関する業務を行ってまいりました。病院全体に関係したマネージメント業務にあたってからは、まだ9か月程度しかたっていませんが、多くの経験をさせていただきました。

当院の理念や基本方針には安全がうたわれてはいますが、実際に全員が安全を第一に考えるように、安全文化を醸成させるのはすぐには困難です。粘り強く改善して安全性を高め、患者様、医療関係の皆様の信頼を得ることが京都第一赤十字病院を発展させていくうえで必須なものです。これからも主として医療安全に取り組んで参りますが、その他の副院長としての業務や呼吸器外科臨床も精一杯努力いたしますので、何卒皆様方のご指導とご協力をお願いいたします。

副院長

上島 康生

趣味

ロードバイクで走ること。

以前は獲得標高1500mを目指して走ったり、ビワイチしたりしていましたが、最近は平地の短距離が主になってしまいました。

「受診して良かった」と言っていただけるように

この度、当院リウマチ内科部長に就任致しました和田誠と申します。これまで舞鶴医療センター、京都山城総合医療センター、京都府立医科大学附属病院で勤務して参りました。

当院リウマチ内科は京都市内から京都府南部地域までを診療圏とする京都府立医科大学附属病院、京都大学附属病院に次ぐリウマチ膠原病疾患の基幹病院であり、多くの患者さんが受診されています。当院に所属するリウマチ内科医は関節リウマチだけでなく、希少な膠原病疾患まで経験豊富なメンバーがそろっています。診察の結果、当科の診療対象としている疾患と診断される患者さんだけでなく、当科が診療対象としている疾患と似ているもののリウマチ膠原病疾患ではない患者さんについても、多くの診療科がそろう当院の強みを活かして正しい診断・治療につなげられるようサポートしていきたいと考えています。これまで以上に「受診して良かった」と患者さんに言っていただけるように日々努力して参りますのでよろしくお願いします。

リウマチ内科 部長

和田 誠

専門分野

リウマチ膠原病領域、不明熱など

胃外科医に戻るリハビリ中です

今年4月に京都第一赤十字病院消化器外科に着任しました。平成元年に京都府立医科大学を卒業し、府立医大第一外科に入局しました。2年間の研修後、松下記念病院で2年間外科医を務め、そのあとは平成5年から29年間京都府立医科大学で教育、研究、臨床に従事しました。研究はモノクローナル抗体によるターゲティング療法がテーマでしたが、今春から新病院長に就任された大辻先生にその当時はご指導頂いておりました。その時以来大辻院長とはずーっと一緒に働いているという感じです。ただ、2022年春から今春までの2年間は大辻院長とは別の病院（京都きづ川病院）で勤務しておりました。きづ川病院では外科業務よりも介護事業部と医療の橋渡し的な業務を主に担っていました。今春の転勤で介護事業から超急性期医療の第一日赤に移り戸惑っておりますが、外科医に戻れるようにまずはリハビリを頑張ります。

消化器外科・
肝胆膵外科 部長

岡本 和真

休日の過ごし方

府立医大医局退職時の餞別として皆からもらった折りたたみ自転車で妻と散策するのが楽しみです。妻のも買いました！

尿検査異常から透析後管理まで

2024年度から赴任いたしました腎臓内科・腎不全科の太田矩義と申します。私は2007年に金沢医科大学を卒業し京都府立医科大学と京都市立病院で研修を行い、中部総合医療センター・京都第一赤十字病院・神戸中央病院・京都府立医科大学に勤務しておりました。医局の人事異動で、京都第一赤十字病院への異動は今回で3回目になります。早く働き方を思い出すように頑張ります。

腎臓内科・腎不全科として地域に貢献させて頂こうと思っております。尿検査異常・体液異常・血圧管理・急性腎障害・慢性腎臓病・電解質異常・オンコネフロロジー・血液浄化療法・腎代替療法選択の分野において患者様の利益を最優先とした診療を行うよう努めて参ります。今後とも、何卒よろしくお願い申し上げます。

腎臓内科・腎不全科 副部長

太田 矩義

ハマっていること

“飲酒”

仕事終わりのビール・ウイスキー・焼酎など最高です。

新たな歩み

この度、肝胆膵外科に着任いたしました生駒久視と申します。1996年に京都府立医科大学を卒業し、2003年4月に帰学してから20年間、研究と臨床に努めて参りました。その間の2006年、山岸久一名誉教授のご高配により、世界的に「The Biliary Man」と讃えられる二村雄次教授のもと、名古屋大学第一外科で肝胆膵外科の専門知識を深める機会を得ました。2012年から約11年間、肝胆膵チームのチーフとして、消化器外科の中でも特に困難が伴う肝胆膵領域で多くの挑戦を経験しました。優秀なスタッフに恵まれたおかげで、多数の厳しい局面を乗り越えて参りました。

その間、日本肝胆膵外科学会の高度技能修練施設Aとして認定され、高度技能医を輩出することもできました。さらに、腹腔鏡手術やロボット手術の導入により、肝胆膵領域での先進的な治療を実現し、日本内視鏡外科学会の技術認定医も取得・輩出してきました。

こちらの病院では、これまでに蓄積した経験と知識を活かし、肝胆膵領域の疾患と向き合っていきたいと考えています。しかし、皆様のご支援とお力添えがなければ、前進することはできません。厳しい道のりが予想されますが、皆様のご指導とご支援を心から願っております。

消化器外科・肝胆膵外科 副部長

生駒 久視

最近のトピック

You Tuberデビュー

昨年から研究会や、学会発表の内容をゆっくり動画解説をつくってYou Tubeにアップしています。どこかで見かけられたら、ぜひ高評価よろしくお願いします。

質の高い大腸外科手術

この度、消化器外科部副部長に就任いたしました栗生宜明と申します。1996年京都府立医科大学卒業で関連病院や大学院などを経て、2009年より京都府立医科大学消化器外科で大腸外科治療に15年間携わりました。この15年で大腸手術は開腹手術から腹腔鏡手術へ、さらにここ数年でロボット手術へのシフトとアプローチ方法が目まぐるしく変化しております。腹腔鏡手術やロボット手術の特長である精緻な操作を駆使し機能温存や合併症の軽減を図り、患者様により上質な手術を提供できればと考えております。また近年増加傾向の潰瘍性大腸炎やクローン病など炎症性腸疾患の手術にも積極的に取り組んで参りたいと思います。

地域の先生方にもご協力・ご指導をいただきながら質の高い外科治療を提供できるよう頑張ります。何卒よろしくお願い申し上げます。

消化器外科・肝胆膵外科
副部長

栗生 宜明

ハマっていること

シャンクのでない ゴルフスイングの研究

SDMを意識した診療

今年度から皮膚科副部長として着任致しました金久史尚と申します。2008年に関西医科大学を卒業後、京都府立医科大学附属病院・市立大津市民病院・市立福知山市民病院・近江八幡市立総合医療センターと勤務して参りました。皮膚科全般の診療を好き嫌いなく行っており、アトピー性皮膚炎・乾癬・円形脱毛症に対する新規の分子標的剤治療にも対応できるようにしております。アレルギー、自己免疫性疾患、腫瘍、感染症、褥瘡、熱傷、足潰瘍なども積極的に診させていただいております。各領域で医療の進歩とともに治療選択肢が多くなっていますので、SDM（; shared decision making　共同意思決定）を意識し、患者さんがより納得のいく選択ができるように心がけて診療しています。地域の先生方や患者さんに信頼頂けるよう精進していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

皮膚科 副部長

金久 史尚

座右の銘

Standing on the shoulders of giants

先人の方々の知恵もお借りしながらがんばりたいと思います。

Tofukuji Digestive organ forum held report

第27回

東福寺消化器　フォーラム開催報告

Japanese Red Cross Kyoto Daiichi Hospital

01

第27回東福寺消化器フォーラムが3月7日（木）にオンライン形式で開催されました。今回は前回から約1年後の開催となりましたが、計101名と多くの方々にご参加いただきました。今回のテーマは「消化器疾患のトピックス」と題し、前半は当科から当院のゲノム医療、小腸疾患診療、肝疾患の動向についての発表を、後半は市立札幌病院の中村路夫先生から「胃癌治療におけるHER2検査の重要性について」の特別講演を賜りました。

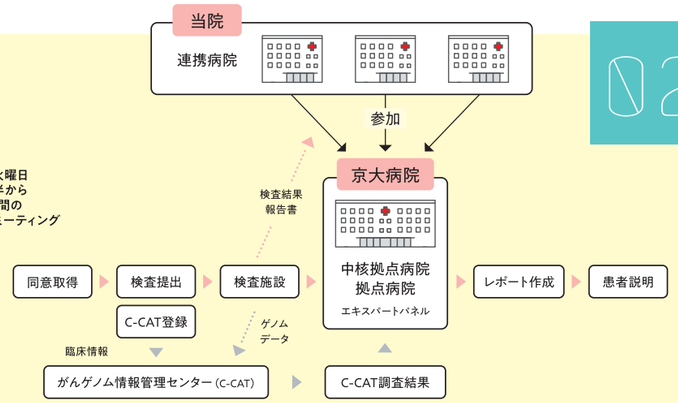
いずれの演題も、ご参加の先生方やメディカルスタッフの皆様にとって、日常臨床にすぐさま生かせる実用的な内容に加え、各分野の最新トピックスが散りばめられた充実した講演内容でした。日頃から病病連携・病診連携にてご紹介いただいた症例を大切にし、質の高い相互診療、若手医師の教育、学術活動の充実を目標に、地域医療の要となる急性期総合病院の消化器内科という立場を堅持し日々努めてまいりたいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

この企画をサポートいただきました、東山医師会、第一三共株式会社、地域連携室の方々に深く感謝申し上げます。

消化器内科 部長　佐藤 秀樹、奥山 祐右

02

毎週火曜日
17時半から
約1時間の
Webミーティング



当院におけるがんゲノム医療の現状について

消化器内科 医長　吉田 寿一郎

遺伝子解析による Precision Oncologyを目的としたがんゲノムプロファイリング検査が2019年より保険適応となり、標準治療終了見込みあるいは標準治療がない固形癌を対象としてがんゲノム医療の導入が進んでいます。当院はがんゲノム連携病院として、拠点病院である京都大学に紐づいた形で検査を行っています。これまで当院で64症例の固形癌に対し遺伝子パネル検査を施行しました。63例で解析終了でき、エキスパートパネルを経て18例（28%）で治療が提案でき、保険診療4例（6%）、臨床試験4例（6%）、患者申出療養6例（9%）、自費診療4例（4%）でしたが、治療に到達した症例は現時点では保険診療2例、患者申出療養1例の計3例（5%）のみでした。治療に到達できなかった理由は全身状態不良、金銭的問題がそれぞれ2例と最多で、その他の理由として臨床試験適格基準外、遠方のため臨床試験不参加などの理由が挙げられました。遺伝子パネル検査結果説明からの生存中央値は229日で、3か月生存率は69%でした。治療到達に至る症例は存在するが少数のため、治療到達率向上に向けたさらなる取り組みが必要です。

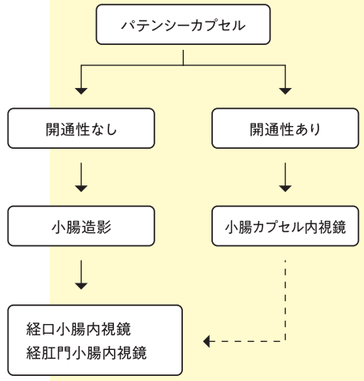
最近ハマっているもの

コーヒーをよく飲みます。いろいろな店のコーヒー豆にチャレンジしています。おいしい豆を販売している店をご存じの方はぜひとも情報共有お願いします。

03

当院の小腸疾患の診療について

消化器内科 医長　田中 信



まず、この2年間における当院の小腸カプセル内視鏡と、小腸内視鏡の検査状況をご説明しました。その解析結果から、小腸疾患の診療は主に出血・貧血の精査と炎症性腸疾患の精査治療になることをご説明しました。

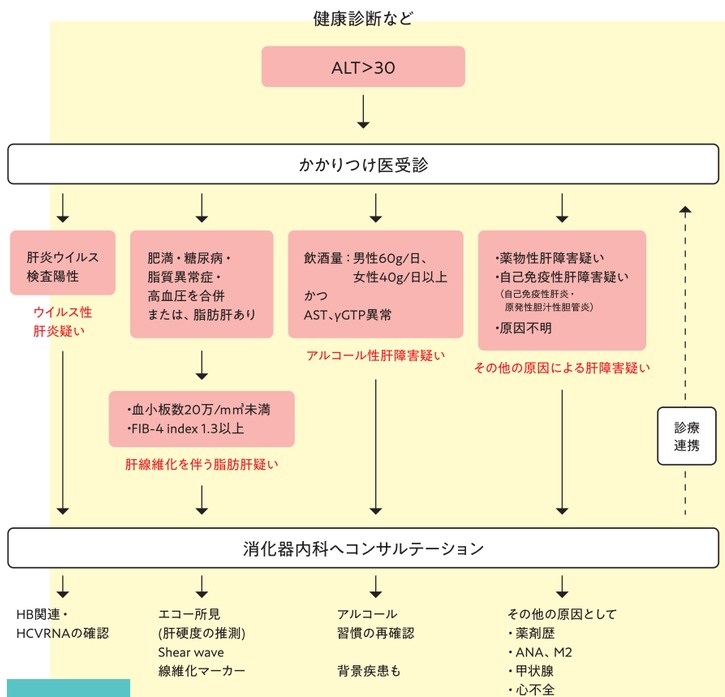
次に、炎症性腸疾患、その中でも特にクローン病の診療についての実際の流れと診断から治療についてご説明しました。クローン病に関しては、治療後に管腔の狭小化が起こる可能性があり、その場合は内視鏡的粘膜拡張術を行うことがあります。内視鏡的粘膜拡張術の詳細についてご説明しました。

最後に、クローン病は早期診断・早期治療が特に重要であり、密な病診連携が必要と考えております。よろしくお願いします。

専門分野

炎症性腸疾患の治療（潰瘍性大腸炎・クローン病）の治療は日々進歩しています。患者さん一人一人の社会背景に応じた治療を心がけています。

04



日本肝臓学会「奈良宣言」報道関係向け説明会のご案内（令和5年5月）演者改変

肝疾患の最近の動向 奈良宣言2023をうけて

日頃は病病連携・病診連携ありがとうございます。肝疾患は抗ウイルス治療の進歩で大きく様変わりしました。肝硬変に至る疾患は非ウイルス性となり、初発の肝癌は半数以上が非ウイルス性となっています。市民の方に広く肝臓の状態を見直すきっかけになるように、日本肝臓学会は2023年6月に「奈良宣言2023」を発表しています。この宣言はYou Tube利用するなど工夫があり、かかりつけ医との良好なコミュニケーションのきっかけになることが期待されています。今回当院の肝疾患診療の概略、疾患概念としての新しい用語のMASLD（Metabolic Dysfunction-Associated Steatotic Liver Disease）について発表しました。

消化器内科 副部長　藤井 秀樹

座右の銘

臨床は日々の積み重ねである（岡上武）
泥臭い臨床やけど頑張りや～（師匠より）

Eito Ikeda

池田栄人 院長退任

45年間 ありがとう!

令和6年3月末日をもって、京都第一赤十字病院を定年退職することになりました。これまでの皆さまのご支援・ご厚情に心より感謝申し上げます。

1978年に京都府立医科大学を卒業後、1979年に京都第一赤十字病院の第一外科に赴任し、実に45年の長きに渡り勤務することになってしまいました。この45年間は、キャリアとしていくつかの時代に分かれます。

1979年～1992年

外科医時代

当時は肝臓外科が発展し拡大手術の時代となり、日赤で第一線の大手術に取り組めたことは外科医として大きな財産となりました。機会を与えていただいた皆様に感謝する次第です。

1992年～2007年

救急医時代

救急部兼務となり、1998年に救急部部長となりました。前院長の依田建吾先生の「救急を断らない」血判状にて招集された医師たちが核になり、京都一の業績を上げ、救命救急センター開設、病院改築に至ることができました。その後、プライマリケアの習得を目指す新臨床研修制度の導入にて、救急医療体制の崩壊をきたさず取り組んで来れました。苦しい時代を支えていただいた皆様に感謝申し上げます。

2007年～2016年

副院長時代

副院長となり、救命救急センター長の他、医療安全推進室長、教育研修推進室長、経営戦略室長などを歴任しました。日赤だけでなく多方面の方と親交ができ、リーダーシップとマネジメント、経営について学ぶ経験ができました。導いてくださった皆様に、感謝申し上げます。

2017年～2023年

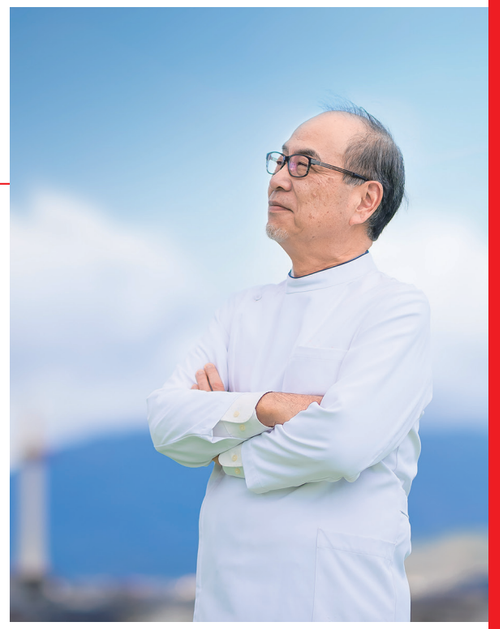
院長時代

2017年に院長に就任、「地域に信頼され選ばれる最高の基幹病院」を目指して、皆さまに力をもらいながら歩んで来ました。臨床・学術・教育・地域連携、そして、「愛と誠と夢のある病院づくり」に取り組むことができたことを感謝申し上げます。

2024年～

新たな時代へ

受け継いだバトンを、新院長の大辻英吾先生に渡します。今後、皆さまと京都第一赤十字病院に、神様のご加護と繁栄があることを願いまして退任の挨拶とさせていただきます。



Wataru Fukuda

福田亙 副院長退任

もう少し走ってみます

令和6年3月をもって、京都第一赤十字病院を定年退職となり、副院長を辞することとなりました。連携医療機関ほか関係者の皆様には長い間お世話になり、本当にありがとうございました。当院に入職してちょうど20年、その前に勤務していた京都第二赤十字病院で通算6年お世話になりましたので、医師人生約42年の半分以上を赤十字病院で働かせていただきました。リウマチ内科医として赴任して院内外の皆様のご支援により診療科の独立と「リウマチ膠原病センター」の設立を果たすことができ、副院長を拝命して以後は医療連携、医療情報システム、研修教育、病床管理、薬剤部関係などいろいろな部門を担当させていただきました。院外の多くの皆様のご協力と院内の多くのスタッフの支援のおかげで、自らの仕事を楽しみつつ、でき過ぎ(?)の成果が得られたと満足しています。

唐突ですが皆さんは、マラソンで「30kmの壁」とか「30kmを超えたところに悪魔がいる」とか聞かれたことがあるでしょうか?42.195kmを走るフル・マラソンでなぜか突然ペースダウンしたり、私のような素人ランナーが歩いてしまったりすることが30km過ぎに多いようです。人間の寿命はわかりませんが、「定年退職」「65歳」で、「ご苦労様」とか「おめでとう」とか言われますが、僕はまだ「ゴール」ではなく、ちょうど30km過ぎかなと思っています。「歩きたいな」という気持ちも少しありますが、今は現役医師としてもう少し「走り続けてみよう」と思っています(マラソンは走れなくなって久しいですが・・)。高度急性期病院とは違う環境で「地域医療」「リウマチ診療」に関わり続けたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

教育研究推進室

病床管理チーム